

日本幼児保育史の研究

日本保育学会共同研究小委員会

四十一、二葉幼稚園の設立（明治三十三年）

当時の文部視学官中川謙二郎は、東京女子高等師範の幼稚園分室とともに明治三十三年一月に生まれた二葉幼稚園を高く評価して次のように言っている。

「幼稚園教育は家庭教育と学校教育との繋ぎであれば社会の階級によらず不具者にならざる限りは四年間の義務教育を受けることになつてゐるから其基たる幼稚園教育に於ても普く保育を受けさす必要ありと思ふに今では之を受くるものは中流以上に多い様である。是甚だ不合理的で多数の者が之を受くる能はずとは甚だ遺憾である。故に今までは受けざりし小児に対し受けしめらる様な方法を研究する必要がある。之は官吏が教育者として考へ筆で書きたてて論ずるばかりではだめなことで、大に諸君の（注

・幼稚園の経営者・教師たちのこと）尽力に依るのであるから幸に尽力せられたい。此の件は多年我が輩の唱うる所で女子高等師範学校にては分室なるものを設け費用をかけしめず中以下の貧乏人の小児でも容易く長く続けて保育を受けうる様にして居る。其他此種の幼稚園としては野口ユカ氏が為て居る二葉幼稚園と云ふのがあつて成だけ下層の小児を保育する様にして居る。何卒皆さ（↑）んも御尽力を願います」

かつて九鬼隆一が子守り学校における乳幼児の保育を「幼稚園の原素」というようにいつた。同じ文部官僚中川が「普く保育をうけさす必要」を論じて二葉幼稚園を模範としてあげたことは国民教育を確立しようとする課題からいえばけつしてふしぎなことではなかつた。二葉幼稚園設立の趣意書には「家庭と相俟つて将来の教育を完全せしめんとする」幼稚園を「中等」以下にもひろげることがを主

張っていたばかりでなく、「幼稚園の時代より街路に立ちて塵埃の内に寒風に打たれ、暑熱にさらされて思ふままに悪戯を為すに至る」子どもたちへのキリスト教徒としてのヒューマニスティックな感情にみだされていた。つまり「良き境遇におき教育を施す」（設立趣意書）ということが、一つのものとしてとらえられていたわけである。このことは、後に幼稚園とは別種の保育施設（託児所・保育所など）が生まれ、二葉幼稚園も、二葉保育園と名称を変更してその系列に組織されていき「教育」という理念が脱落させられていったということをかながげるとき、重要な意味をもつてくるであろう。

「下層の小児を保育する」幼稚園―二葉幼稚園は、明治三十三年（一九〇〇）野口幽香、森島峰（後に斎藤）の兩人によって誕生する。東京・麹町下六番町の狭い露路のゆきづまったところにある、小さな借家をつかっではじまったのがそれである。

「八畳に六畳、二畳二間庭十二坪あり、広き室を遊嬉室とし他の一室には台を置いて仕事又は食事などなさしめ、小さき二室は小使室と物置などに用ふ。家屋の不完全なるはいふまでもなく一室の如きは光線充分に入らざる為庭に葦簾の屋根を作り遊嬉場となせり」⁽²⁾

巖谷小波は「少年世界」誌のなかで「場所は前にも云ふ通り下六番町二十七番地の酒屋の露路の一番奥で八畳に六畳、たった二間に十二坪程の平庭がある斗り、之は壮士の合宿とやらで、随分乱暴に住み荒らしたものですから、柱は傾き壁は落ち見るからむさくるし

い裏屋であります、その中に罪もない幼年幼女がさも楽しみに遊び戯れて居る有様、世はまだ余寒の風が吹いても、実にこの一と構の中にはいつも春の温気を湛えて、垢染みた油屋さん（胸掛）や、つぎはぎの筒袖姿に交って、背中に綺麗な羽根の生へた、玉の様なエンジェル（神の使）も一所に躍り狂ふかと思はれて何とも云はれない可愛らしさです」と書いた。

はじめ園児六人、そして六カ月間に十六名（うち男十二名）となり小さな施設は満員となった。「入園志願者は絶えず来たり其満員なるをききて非常に失望し中には何故かく広き所に十五名より入れられざるにや、八畳に六畳しかも縁は長し二十名、三十名に入れて余りあらんなど已が不十分の住居より推測してかかる理屈をいふもあるに至る」と「第一回報告」（明治三十三年七月）は書いている。すべてが貧しいが、まずは好調なスタートであった。このためには、たくさんの方の支持者がいたことを忘れてはならないであろう。

明治三十三年七月にだした「私立二葉幼稚園第一回報告」のはじめには次のように書いている。

「追々暑氣烈しく相成候処御機嫌よくいらせられめで度存じ候陳は多年の志望漸く熟し本年一月貧民幼稚園を設立致し候いしが其当時は一人の賛成者もなく寄附の予約もなく唯四百円以内の金額にて一年間の維持を見込み不幸にして世の同情を得ざれば止むより外なしとの考にて相始め候御皆様の御賛成を得実意外の結果を奏し或は金子に或は物品に各々真心を籠めさせられたる御寄

附は絶えず集り来たり兩人の喜と感謝は実に筆紙に尽しがたく今は規模小さき幼稚園を維持して余りあるの寄附契約を得尚臨時寄附はそれ／＼積みみて幾分の基本金も出来候次第に御座候 目下一ヶ月の定期寄附金五拾円に余り候故適當の家屋だに見当り候はば四、五十名の入園は許さるる事に候」

そのよるこびは、たとえようがなかったであろう。「私の知人や上流社会の人たちに当ってみますと、毎月五十銭づつ出して下さる支持者が五十人すぐ集りました」と野口はその当時を語っている。二葉幼稚園を支えたものは、このような賛同者の寄附によってではあるが、左にその寄附の方法と、設立当初一月から六月末日までの決算報告とを紹介しておこう。

一九〇二年（明治三十五年）十月十一日他のアメリカのボストン

寄附の方法

定期寄附 毎月五拾銭

之は本園の經常費エ充ツ

臨時寄附 定額ナシ

之ハ一部ヲ基本金ニ積ミ立テ一部ヲ準備金ニ積ミ立ツ

物品寄附 玩具、絵画、紙類、衣類等

集金法 定期寄附ニハ毎月集金人差出シ

臨時寄附ハ御通知次第請取人差出ス

二葉幼稚園創立当初の財政

(私立二葉幼稚園第一回報告 自明治三十三年一月 至 同 六月)

〔収入〕		〔支出〕	
前年分音楽会子	428円11銭	創立費	69円93銭 3 厘
純益及利		報酬及給料	97円25銭
定期寄附金	222円45銭	借家賃	45円60銭
臨時寄附金	577円11銭	薪炭費	7 円11銭
保育料	17円83銭	器具費	18円58銭 5 厘
		雑費	5 円17銭 7 厘
		印刷費	7 円05銭
		集金費	5 円94銭
		基本金と積立として	387円27銭
		準備金と積立として	500円00銭
		經常費として 次月へ繰越	101円58銭 5 厘
収入総計	1245円50銭	支出総計	1245円50銭

(註) 保育料とあるのは日に一銭宛持ってこさせた。途中でおよつ代 5 厘および貯金 5 厘とした。

での週刊誌「サ・ウーマンズ・ジャーナル (The Woman's Journal)」は二葉幼稚園のことをとりあげていた。

「東京の斉藤夫人、もとは森島峰嬢(彼女はノラ・エー・スミス Nora A. Smith 嬢から幼稚園教育の手ほどきをうけた)と野口幽香嬢は一九〇〇年に、彼らの市の一角のきわめて貧しい子どもたちのために二葉幼稚園 (Seed Leaf Kindergarten) をつくった。彼らは最初四つの小さな部屋をもつ古い木造家屋、それも幼稚園のためにつかえるのはたった二つであったが、そこをつかっていた」

と報じている。

いまこの週刊誌を引用したのは設立者の一人である齊藤峰（一八六八〜？）について語りたからである。彼女は野口のかげにかくれてしまつてくわしい経歴はわかつていない。野口によると「森島さんは、津田梅子先生のお世話で、アメリカの西海岸で貧民幼稚園の勉強をしたのち、麴町平河町で一年ばかり私立の幼稚園を開いておられた新知識の方でありました」ということで明治二十七年に野口とともに華族女学校の幼稚園に就職する。ノラ・エー・スミスと齊藤との関係もこの「貧民幼稚園」もどのようなものであるの不明である。一八七八年にサンフランシスコでフェリック・アドラー博士がフリー・キンダーガルトン（無料幼稚園）についての一連の演説をおこない、貧しい子どもたちのための幼稚園運動を展開して⁽⁷⁾いたことならかの関係はありはしないだろうか。

野口幽香（一八六六〜一九五〇）は明治二十四年の春、東京女子高等師範学校を二十五才で卒業している。この女高師でなにもわからなかった野口にフレイベルの精神をつたえたのは寄宿舎で同室の尾藤初子であったといわれる。⁽⁸⁾卒業後、女高師附属の幼稚園につとめ、四年の後には女高師と華族女学校を兼ねていた細川潤次郎⁽⁹⁾の推薦で華族女学校附属幼稚園にうつった。

彼女は女高師の生活を「私が勤めるやうになりました頃の幼稚園は、形式がととのつてきました反面に、創立当初の理想や熱が、やや衰へかけていた時代で、無能な私は、平々凡々のうちに四年間を

暮してしまひました⁽¹⁰⁾」と言い、華族女学校でも不満をもっていた。

「華族女学校の経営は、大体のところ、保姆である私どもの自由になつて、大へん働きよい場所でありましたが、ただお乳母日傘式に育てるだけで、信仰を中心として子供を導くことは許されてをりません。その点で、いくらか物足りないものを感じていた折でしたから、かうした道端の子供を集めて、フレイベルの理想通りにやつて見たい、といふ希望が期せずして若い二人の胸に湧いてきたのであります⁽¹¹⁾」と野口は語っている。

彼女は学生時代にすでにキリスト教の信仰を身につけていて番町教会に通っていた。二人の若い夢を実現にむけての助言と協力をおしまなかつた人がその教会にいた。ミッショナリーのミス・デントンであつた。彼女は

「大へん結構なことだと賛成されたばかりでなく、私どもの先に立つて、募金のための慈善音楽会の開催に骨を折つて下さいました。ミス・デントンは、八十いくつの高令で今なほ京都の同志社にをられますが、その生涯を日本の女子教育のために捧げた、特別なアメリカの婦人であります。ミス・デントンがいなくても、時代の要求を以て日本に貧民幼稚園は生れたでせうが、しかし、このときもミス・デントンがゐなかつたなら、私どもの二葉幼稚園⁽¹²⁾の設立は、更に数年の歳月を要したことだろうと思はれます⁽¹³⁾」

というように野口は語っている。

こうして明治三十一年三月、東京大学の哲学の教授として活躍しながらも、東京音楽学校の講師をもつとめるほどピアノをひきこなしたケーベル博士の初の演奏会がおこなわれ、七百円余の純益をあげる事ができた。⁽¹³⁾ その金を孤児救済事業をしていた本郷育児暁星園とわけることよって四二〇円余りが二葉幼稚園の資金となることができた。

それから二年ちかくの期間を準備にあて、麴町下六番町の小さな家を六円で借り、集ってきた六人の近所の子供を最初の園児として三十三年一月に二葉幼稚園は発足したのである。

「私立二葉幼稚園規則」は次のようなものであった。

第一条 本園は虚飾を去り簡易を旨とし満三年以上就学年令に達するまでの幼児にして普通幼稚園に入園し能はざる事情ある者を保育するを目的とし傍父母が育児上に於る煩勞を求き家事を営む余裕あらしむるを期す

第二条 保育項目は遊嬉・唱歌・談話及手技とす

第三条 保育時数は一日七時間或は八時間とす

第四条 休日とは左の如し

日曜日、大祭日、祝日

冬期休業自十二月二十五日至一月五日、但し冬期休業は事業により伸縮することあるべし

第五条 入園を望む者は父兄又は後見人の職業、幼児の住所、姓

名、年令等を申し出で園長の許可を受くべし

但し本園に入園するの必要なしと認むる者は之を許さざることあるべし

第六条 退園せんと欲するものは父母後見人より其の理由を申し出て許可を請うべし

第七条 幼児は本園管轄の下に毎日貯金するの義務あるものとす但し休日及欠席したる日は納むるに及ばず

第八条 幼児及父母後見人の転居したるときは其旨申し出づべし

この「規則」の内容を、もうすこし具体的に「私立二葉幼稚園第一回報告」のなかからうかがってみよう。

「幼児は毎日午前九時より午後三時に退散する規則なり。されど朝飯を終るや直に幼稚園に行かんことを望む。親も亦子供等早く出て行かん事を欲するが故に七時八時頃には来園せしむるを常とす。これは今少し保育時間を多くし土曜日曜の休等も廃したき考なれど一人の保姆⁽¹⁴⁾の到底なし得る所にあらざるを以て当分かなせり。幼児の入園せし当座は日曜日には必ず来りて外より窺い其淋しきを見て立去るを常とす。子供の仕事は他の幼稚園の如く多くの恩物を用ひず其の爲には少しの費用をも費さざる考にて最初幼児の一般に好む積木等も材料の不廉なるを以て備へざりしが諸方より不用の木片数多贈られしを以て今は日々家を積み取らしめり。紙の如きも寄贈品を用い、古状袋の中の色紙を抜き取り

て折物等に用い古郵便切手を切り抜きて古き雑誌の紙に貼り付けるなど総て廢物利用の方針をとり居れり」と。

ここには、簡潔に保育の方針がのべられているが、注目しているのは「他の幼稚園の如く多くの恩物を用いず」という点であろう。

保育の方法において恩物主義の支配的状況からぬけきっていない頃のことである。ところがこの様な日本の現実が、恩物主義の脱却を要請していたのである。「保育時間は日に五時間でその課題には矢張り普通の幼稚園の通り遊戯・唱歌・談話・手技等ありますが、兎に角相手は貧家の小児で、今まで野放しの癖が付いて居ますから、今急に規則にはめて強いて秩序を立てやうとすると却って裨益に成ませんので、まだ此頃の処では、手技とか唱歌とかは次にしてまづ遊戯を主にして居ります」と保姆は巖谷小波に語っている。

さらに保姆が巖谷に語っている保育の重点はコトバと生活習慣・衛生と精神的歪みの治療などであった。

コトバについては「あたたい」「おいら」といつていたのが「わたし」「わたし」というようになり、「おめエ」「てめエ」とよんだのが「あなた」「何さん」というようにしていくコトバ使いついてであり、もう一面では兎と龜のはなしをしても実物を知らないためにおこる問題であった。

生活習慣・衛生についてはいえばこうだ。「この少児達の中には、朝起ても手水を使わないと見えて、目は脂だらけ、鼻は垂らし放題、手足は凍傷や疥癬で、目も当てられない様なもあります、

そう云ふのは先生が一々石鹼で洗ってやって、そして凍傷や癬の酷いには、それ／＼薬の手当をして、ちゃんと細帯までしてやるのです」

また「小児の中に、一人耳の遠いのがあります。この小児は家に居る時分、近所の小児に馬鹿にされて『つんぼ／＼』と云はれて居ましたが、小児心にもそれが悔しいので、とう／＼気が変にひがみ、始終懷中に、出刃庖丁の古いのをに入れて、自分からかふ者があると、直ぐにそれを打付けて居ましたが、或時其の出刃を落して、自分で自分の足を切りました。けれども貧乏人の事ですから、医者に見せて癒してもらふ事もせず、襤褸か何かで巻いて置きましたから、容易に癒る筈はありません。で、幼稚園に入るのにもびっこを引きながら来た位でしたから、先生は見て気の毒がって、直ぐに石炭酸でよく洗って、ちゃんと細帯してやりましたので、瘡は間もなく癒りましたが、それと一所にこの児の『ひがみ』……即ち心の瘡までも、すっかり癒ってしまったさうです」——というのは精神的な歪みにたいして働きかける教師の重要性をものがたつていう。

こうして二葉幼稚園は新しい幼児教育の課題を背負って出発した。明治四十年に伊沢修二が、幼稚園の教育が日本の子ども達の生活からはなれてしまい「唱歌などに至っても中々優美な高尚な言葉である、子供は何のことが意味がわからない」ことを批判したことがある。二葉幼稚園の保育は実際において明治時代の形式主義保育を

こわしていつていたことがこの文からもうかがうことができるであろう。

それは保育形態においても「園外運動」の重視、家庭との連絡、小学校との連絡など新しい実践をおこなったのである。それを「第一回報告」から全文引用してみよう。

「園外運動 一日渡辺筆子氏は幼児一同を自宅へ招かれたり、其前日なるべく顔や手足を奇麗にして来るべき旨話し置きしに多くの幼児は入浴せり。一人の子供は入浴も出来ざりしものと見ゆ、鹽に水を汲みもらひて裸体になり全身を洗いたりといへり。かくも熱心且楽しみて待ちし当日は白の前掛の新らしきを一同にさせ列作りて五番町に行けり。庭広く芝生の上自在に遊ぶ其喜はたとへんにもものもなく、いつかはかかる広き所に遊ばしめんと願達せし吾々の喜も子供に同じく綱引にてもせんとて綱など用意せしも喜び狂へる子供には命令も耳に達せず各自綱を引張りて曰、井戸がへく、因に記す。幼児は一月に一回の入浴を常とす或児の如きは去年大晦日に入りて今年三月末日学校に行くからとて入浴せしもありき、尤これは冬の事なり。夏期は行水の為大に清潔となるなり。入浴は幼児にとりて非常に珍らしき事故翌日幼稚園に来る時は幾度も入浴せしを告ぐるなり。

家庭との連絡 如何なる幼稚園にしても家庭との連絡は最大切なる事なるが本園の如く親を助けんとの主意をも兼ねたる所にては殊更其の必要あるなり。抑々親をして子女教育の大切なるを

覚らしめよく働くの習慣を養ひ貯蓄の念を起さしむれば彼等は貧民界より脱して一步上進せしものといふべし。故に先づ親との交際を親密ならしめん為、家庭訪問と父母懇話会とを始めたり。家庭訪問は時を定めず尋ね行き殊に病児などある時は度々行きて注意を与ふるなり。この訪問は父母子供の為にもよけれど貧民社会の事情を知らんと思ふ吾々には少からぬ利益を与へらる。父母懇話会は凡そ一月一回開かんと希望なれども今期は三、五の両月に二回開きしのみなりき。両会共来会者十名許大抵は乳呑児を携へ尚一人の手を引くもありき。凡そ一時間許教育の必要幼稚園の主意親の心得など平易に話しかせ終りには互に談話し菓子等与へしに何れも大喜にて幼稚園に対する感謝の念一層増したる如く各自子供のよくなりし事を喜び己等の内職の大なる助たる事を謝するなど結果大によりき。尤かかる親は此社会にては稍わけのわかりたる仲間にて中には子供が喜ばぬからとて連れ来らぬもあり、弁当容るが面倒なりといふもあり、もしかかる子供ある時は其家庭につき原因を調べ親の不熱心より起れる時よく説諭し再三説諭して尚きかざる時は断然謝絶するなり。これ本人にとりては憐むべき事なれども他の戒となり皆謹で規則を守りよき習慣を作るに至るなり。かかる親の中には謝絶されて初めて困り出し又入園を依頼するに至るものあるなり。

小学校との連絡 本園と主意を同うせる小学校の必要はいふ迄もなく親もまた之を望み中には夜学の教授を依頼し来るもある

なり。本園幼児にて就学年令に達せる者を其儘にするは此事業を破壊するに等しければ工夫の末之を近傍の代用小学校長中村桑次郎氏に計れり。同氏幸に本園の主意を賛せられ本園より入学する者は特に授業料を減じ其他種々便宜を与へられしかば本年四月二名の幼児をして学に就かしむるを得たり。此事ききたる幼児の兄姉特に志願せし者ありて共に本園幼児同様に取扱ふ事を許され四名の生徒は本園監督の下に日々通学せり。

学校に行く者は欠席すとも日曜日の外毎日壹錢五厘宛持米らしめ授業料を収めたる残余にて筆墨紙を調へ置き一々受取りに來らしむ。かかる手数は多数の生徒に為し得べき事ならず、同主意学校の設立のせられん事希望に堪へず。

病児の取扱 少しの怪我「アカギレ」「ヒビ」等は薬品を調へ置きて治療を施せども病氣の場合には如何ともする能はざりしに赤坂病院院長「ホイトニー」氏及回生病院医員木沢敏氏は非常に此業を賛せられ

自ら進んで病児の世話せんと申込まれしかば爾來幾人かの子供は治療施薬の有りがたき恵に浴せるなり、両親と子供に代り深く感謝す」
(六戸)

- (注)
- 1 大阪保育会における演説「京阪神聯合保育雑誌」第13号、明治三十七年十二月
 - 2 「私立三葉幼稚園第一回報告」明治三十三年七月
 - 3 「私立二葉幼稚園第一回報告」所取
 - 4 野口幽香と森島峰
 - 5 神崎清編「現代婦人伝」60ページ
 - 6 同右 56ページ
 - 7 津守真ほか著「幼稚園の歴史」134ページ
 - 8 神崎清編「現代婦人伝」53ページ
 - 9 「二葉」という称は細川潤次郎の幼稚園保母合唱歌のなか「二葉撫子さかゆく園生(そのふ)」という句から選んだといわれる(神崎編「現代婦人伝」60ページ)
 - 10 神崎編「現代婦人伝」55ページ
 - 11 同右 59ページ
 - 12 同右 59ページ
 - 13 右同 60ページ
 - 14 専任保母として平野まちがいた。野口と森島は華族女学校幼稚部をやめることができず、その仕事をおえてから隔日に出園し監督と事務の仕事をした。
 - 15 「私立二葉幼稚園第一回報告」
 - 16 「京阪神聯合保育雑誌」第20号

幼児の教育 第六十二巻 第九号

九月号 © 定価六〇円

昭和三十八年八月二十五日 印刷

昭和三十八年九月一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館 にお願いたします。